

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

ソリッドブレイド紅

SOLID BLADE KURENAI

小説 斐芝嘉和

挿絵 さくらもちあんこ

プロローグ

第一章 橘由佳莉

第二章 毘

第三章 沢木美奈子

第四章 紅乱舞

第五章 淫獄の始まり

第六章 歪められた絆

第七章 悦宴・淫華繚乱

006

016

035

044

075

118

167

207

登場人物紹介

Characters



たかはな ゆかり
橘 由佳莉

琴城学園の生徒。町道場の娘で、剣の道を極めんとしている。明朗快活、直情径行な性格で、正義感が強い。時代劇マニア。

さわき みなこ
沢木 美奈子

琴城学園の生徒。由佳莉の親友で、大人しい性格の眼鏡っ娘。

いするぎ こうじ
石動 幸司

街の自警団を率いている少年。

「……分かったわよ。なにをすればいいの？」

「決まってるじゃねえか。アンタの恥ずかしい姿を撮^うすんだよ」

「……ッ!？」

キッと目を剥く少女を無視し、相馬は低い三脚にビデオカメラを取りつけ、次いでプロジェクターのスイッチを入れる。なにもなかった壁に、部屋の様子が映し出された。即席のスクリーンを見ながら立ち位置を指示し、映像に向き合う形で座るよう命じる。

「まあ、この娘みたいなことをしろって言ってもすぐには無理だろうから、今日はペッティングだけで許してやる——なにしてんだ、早く座れよ」

はらわた 腑^{はらわた}が煮えくりかえるかと思うほど腹が立つが、いまは男の言葉に従うしかない。洪々腰を下ろすと、さらに細かい指示が飛んできた。

「手をうしろについて……片方だけでいい。膝を曲げて、脚を開け。そしたら、空いているほうの手を股間に……そう、いいよ、やらしいよ」

ボディラインを浮き上がらせる紅い革服を着たまま、はしたなく大股を広げ、掌で秘部を隠したポーズ。低い位置に据えられたカメラのレンズには、ムチムチした脚をM字に開き、視線を求めて秘部を突き出し恥丘を弄っているように映る。見上げるようなアングルのため、背後についた腕に支えられて斜めに傾いた胸の上、メロンほどもありそうな双球がたわわに実り、顔を半分も隠してその大ききさを見せつけていた。

(なんなのよ、コレ……)

壁に投影された己の恥ずかしい姿に、頬を赤らめる由佳莉。身にピタリと貼りつく紅革のライディングスーツは、四方から浴びせられる照明にぬらぬらとしたエナメル質の輝きを放ち、フェチズムの香りを醸していた。足元を固めるワークブーツやロボットの手のようにゴツゴツとしたグローブも、この状況では拘束具のように見える。

(紅なのに……正義の味方なのに……)

自分のイメージとは正反対の弱々しい姿に、心が揺れる。

「次は、これだ」

白いチューブを手にした相馬が少女の背後に回り込み、細い注ぎ口を胸の膨らみに向けてギュッと搾った。薄められた水飴のような透明の粘液が流れ出て、大きく盛り上がった胸に異国の文字を描く。金木犀に似た香りのする粘液は乳房の谷間を流れ落ち、腹を濡らし、手の下にある恥丘にまで垂れ落ちた。蜜に濡れた紅い革服が、太腿のつけ根にひっそりと息づく恥ずかしい粘膜器官を連想させ、由佳莉は頬に羞恥の朱を上らせる。

「な、なにすんのよ！」

「じつとしてろって。ただのローションだ、洗えば落ちる」

そう言われても、ねっとりとした甘い香りを放つシロップでデコレーションされた自分の姿が巨大な女陰に見えて、無敵の剣士たらんとしている少女の自尊心を深く傷つけた。

しかし、のんびりと羞じらっている時間はない。

ふたつの膨らみにたっぷりと粘液を垂らした相馬が、チューブを床に置くと由佳莉の背に貼りつくように座り、脇の下から手を伸ばして乳房を下から押し上げるように掴んできた。紅い革の表面をいやらしく濡らした液体は、握り込む手をにゅると滑らせる。

(あ……)

急いで飛び出してきたため、ライディングスーツの下にはなにも着けていなかった。胸の柔肉を締め上げるほどびったりと貼りつく革服は、指の蠢きをダイレクトに伝えてくる。まるで直接揉み上げられているような感覚。粘液に滑る指の動きが、乳房の肌をくすぐるようでこそばゆい。

「ちょ、ちよつと……やだ、そんなに強く掴まないでよ……!」

「しばらくの我慢だ。そのうち気持ちよくなってくるって」

紅い髪に鼻を埋め、うなじに頬を擦りつけた男が低い声で囁く。敏感な耳裏に吹きかかる生温かい息に、背筋がゾクゾクッとなった。気持ち悪さのために身を揺すると、相馬は喉の奥で笑いながら少女の身体をまさぐり始める。手が動くたび、胸の双球から糸を引いて大きな滴が垂れ落ち、腹から股間へと流れていく。

「服の上からなのに、いやらしく踊るじゃねえか。ずいぶんと感じやすいんだな」

「……!」

粘りつくような口調に、由佳莉は肢体を強張らせた。本人は不快さに顔を顰めているつもりなのに、壁に映し出された紅づくめの少女は頬をほんのりと桜色に染め、仔猫のように目を細めている。いいように撫で回される屈辱に身を振っているはずが、気持ちよさをこらえきれずにゆるめると悶えているようにしか見えない。藻掻くたびにたぶたぶ揺れる胸の双球は、紅い革を濡らした糸引く粘液のせいで、熟れきって蜜を滴らせている熱帯産の妖しい果物のよう。むにゆり、むにゆりと沈み込む指が、カメラのレンズに果肉の弾力を見せつけている。

このビデオを見た者は、由佳莉をどんな娘だと思うだろう——それを考えると、顔から火が吹きそうなほど恥ずかしくなった。

（紅は、正義の剣士なのよ……こんなことされるような者じゃ、ない……のに……）

だが、拒むことはできない。美奈子を助けるためには、この男の情報が絶対に必要である。どんなにイヤでも、いまはジッと我慢しているほかはない。

「柔らけえオッパイだな。弄り甲斐があるぜ」

羞じらう少女を無視し、男の手は乳房の形を確かめるように円を描きながら、胸丘の麓から頂へ向けてゆつくりと上がっていく。蠢く指に揉み歪められ、掌に捏ね潰されるたび、ローションに濡れ光る双球からにちゃにちゃと卑猥な音が立つ。革服の下、裏地に擦り上げられた肉球が徐々に熱を帯び、少しずつ汗ばみ始めていた。

「く……あ！」

膨らみの頂点へ這い登ってきた手指が、革服越しに乳首を掠めた。いつの間にか硬くなっていた肉突起に快感が閃き、思わず声が出てしまう。慌てて唇を噛んだが、背に貼りついた男は耳敏かった。

「んん？ どうした？ ここになにかあるのか？」

「な、なにも……ないわよっ！」

耳の先まで紅くして言い返す少女を無視し、相馬の指は肉球の先端を集中的に揉み始めた。裏地に擦れた肉突起や乳暈が敏感さを増し、熱く疼き出す。熱は少しずつ乳房の奥へ浸透していき、やがて柔らかな膨らみ全体がじつとりと汗ばむほどに火照ってきた。

指が蠢くたびに乳首はますます膨らんで、革服を突き破ってしまうのではないかと思うほど硬く勃起している。紅い草の上からでも分かるのか、男の人差し指が真上から押さえ、とととと、と細かな振動を与えてきた。

（あ……ヤバイ……！）

微細な衝撃は乳房の中で増幅され、恍惚の細波となって身体のコに打ち寄せてくる。背骨を伝って上下に広がった温かな陶酔の波は、脳の底をくすぐり、子宮の中に肉欲の卵を産みつけて、少女の肢肉を蕩かしていく。

「ちよ、ちよっと……やめ、そこばかりは、ダメ……！」



このままでは気持ちよさに耐えられなくなる——そう思っただけで、
「オッパイ全体を揉んで欲しいのか？ いやらしい女だな」

由佳莉の言葉を逆手に取って、男は遠慮なく肉果を揉み始めた。

「く……う……！」

蠢く指は頂点に集中していた快感を散らし、乳房全体が淫欲の塊となる。脂肪を捏ね回されることが気持ちよくなり、汗に濡れた裏地が肌を滑る感覚に悦びを覚えてしまう。愉悅を孕んだ胸丘はいつもより一回り大きくなり、弾けそうなほど硬く膨れ上がった。ぴったりだったはずのライディングスーツの胸がきつくなり、息苦しくなってくる。

「ね、ねえ……アンタのネタって、どの程度のモノなの？」

胸の膨らみを占拠した快感から気を逸らすため、由佳莉は首を捻って背後の男に訊いた。情報屋としてのプライドが傷ついたのか、相馬はムッと唇を尖らせながら少女の乳房を痛いほど強く握む。

「あ……ん……っ！」

押し潰された肉球に強烈な快感が爆発し、唇を噛んで甘い喘ぎをこらえる由佳莉。口——に覆われた双球は圧力から滑って逃れ、糸引く飛沫を飛ばしながらぶるると、と跳ねた。

「俺が信用できないって言うなら、買ってもらわなくなっていいいんだぜ？」

「そ、そうじゃなくって……こんなに恥ずかしい思いをして、ヒント程度だったらバカみたいじゃない。だから……あ」

それまで執拗に乳房をまさぐっていた手が離れ、喉から身体の中央に走るジッパーにかけられた。止める間もなく胸の半ばまで引き下ろされると、窮屈な革服を振り払うかのように乳房が踊り、内側からグイッと押し分けられたライディングスーツがヘソの辺りまで真っ二つに割れた。その下から胸乳の谷間が覗き、朱鷺色に染まった艶めかしい肌が現れる。

ハッと顔を上げると、スクリーンの中の自分と目が合った。羞恥に頬を強張らせた紅髪の少女は、ぬらぬらと輝くいやらしい粘液を滴らせながら革服の前を左右に開き、そこからメロンほどもありそうな大きな乳房を半分ほど覗かせて、弱々しく震えていた。寄せ合わされてなくてもなお深い柔肉の狭間に涎のようにツウツと一筋垂れているのは、服から振るい落とされたローションだろうか。

（ち、畜生……！）

こんなのは、自分じゃない。こんな恥ずかしい姿が、自分のモノであるわけがない——顔を背け、ギョッと瞼を閉じる由佳莉。

「へえ、中は全裸かよ」

しおらしく羞じらう少女に機嫌を直したのか、相馬は再びニヤニヤと笑い、革服を抓ん

で左右に払った。重力に逆らって丸く膨れ上がり、グミの实のように艶々と輝く乳首をツン、と天井に向けた胸乳が、覗き込むレンズの前にすべてを晒け出す。上氣した柔肌は濃淡さまざまな朱に染め上げられ、滲んだ汗に覆われていやらしく輝いていた。

「どれ、手触りはどんなもんかな？」

「あ、ちよつと、やめ……っ！」

ローションにぬめる指が、直接肌に触れてきた。膨らみ具合を探るように、胸から急角度で立ち上がる柔肉の麓をにゆるつと撫でられる。爆発する羞恥と嫌惡に力の限り暴れそうになったが、

「ジッとしてろつて。大人しくしてねえと、ヒントもやらねえぞ」

身体をギュウと抱き締められ、すんでのところで我に返った。

そうだった。美奈子のために、ここは耐えなければ――。

「わ、分かったわよ……だから、ちよつとずつでいいから、なにか話して」

イヤそうに眉を歪めながら、男の胸に背を預ける紅髪の少女。相馬はだらしのないほど相好を崩し、大きく割れたライディングスーツへ手を差し入れながら少しずつ話し始めた。

「リーダーの石動って奴は、イイトコのボンボンでな。金回りもいいし、あの顔だから女にもモテる。普通にしていても並の男より幸せな人生を送れるだろうに、それがつまらなかったのかね？ チンピラ連中を集めてあんなことを始めやがった」

喋りながらも、手は止まらない。

重みを確かめるように、たわわな乳果を下から支えた掌が跳ね上げるようにして揺すってくる。膨れ上がって敏感さを増した乳首が激しく上下に踊り、空気に擦れて羽根でくすぐられたようにこそばゆい。ローションに濡れた肌は掻きむしりたいほどむず痒くなり、焦れたい気分になってくる。

（あ……やだ、どうして……!?!）

たぶたぶと波打つ脂肉の塊が急に沸騰し、パンパンに膨れ上がって痛みすら感じるようになった。ライディングスーツに締めつけられているときと似ているが、それよりもつとずつと、切迫した感じ。男の指に触れられている場所だけが蕩けたように気持ちいい。

——胸乳が、揉まれたがっている。

（そんな……そんな、バカな……）

自分の身体が示した淫らな反応に戸惑い、由佳莉は真っ赤になった。追い討ちをかけるように、男の指が膨らみの根元を掴んでギュウ、と圧してくる。

「はあうっ!？」

胸丘の麓に広がる肉悦と、それより先に膨れ上がる熱い疼き。煮えたミルクが出口を求め、乳首に向けて集まり始めたような——乳暈の裏が痒くなり、肉突起は限界以上に膨らんで、小指の先ほどの大きさにまでなった。真紅に輝く乳頭は、微弱電流を流されたよう

にピクピクと震えている。

「う、くうう……！」

相馬の手が、乳を搾るように捻りを加えつつ根元から先へ向けてしごき始めた。いまにも爆発しそうだっただ乳房が揉み解され、重苦しい痛みが嘘のように消える。代わりに、生まれて初めて感じるような強烈なもどかしさが、美乳の中に膨れ上がった。

もつと、もつと——もつと強く、揉んで欲しい……。

(ち、違う……そんなこと、して欲しいわけ、ないじゃない……)

慌てて否定するものの、搾乳の動きに肉果は蕩け、こらえきれないほどの疼きが同じ強さの心地よさに変化する。恥辱に強張っていた頬が、ふわ、ふわ、と恍惚の表情を浮かべて弛む。頭の中にはピンク色の靄がかかり、まとまった思考ができなくなる。

ぬちゃ……ぷちゅ、にゅちゅ……。

左右から圧されて寄せ合わされ、互いにめり込むように柔らかく歪んで擦れ合う柔肉の谷間は、ローションを塗り込まれて卑猥に輝き、泥遊びをしているような音を立てた。花霞に染まった艶めかしい乳肌は、揉まれるたびに甘酸っぱい乙女の芳香を発し、由佳莉の鼻腔をくすぐって羞恥心を掻き立てる。

「さ、先を……あうっ!？」

感じていることを悟られないよう話を続けさせようとした由佳莉の乳首に、電撃のよう

な快感が走った。そこが硬く痼っているのを知った相馬が、指の間に挟んで力の限り押し潰してきたのだ。硬い指節に揉みしごかれた肉突起から、乳の柔肉に突き刺さってくる快悦は、いままでの陶酔感がおままごとに感じられるほど強烈だった。

「ま、待って、ダメ……あううっ！」

「なんだ？ 先を弄れと言うから弄ってやったのに」

わざと取り違えた男は、なおもコリコリと抓ってくる。手を上げて止めようとする由佳莉だが、乳首に発した気持ちよさが全身の筋肉を蕩けさせ、不埒な腕を払い除けることができない。

（な、なぜ……こんなに強く、感じたこと……ないのに……っ!?）

他人の指に弄られているという恥ずかしさのせいか、自慰とは比べものにならないほど敏感になっていた。捏ね揉まれるほどに鮮烈な快美感が閃き、腰が悶えそうになる。

さらに――。

（や、やだ……っ!?）

触れられていないはずの股間が、うずうずし始めた。胸に充満した肉悦が、いつの間にかそんな場所にまで届いていたらしい。革服に擦れている媚肉の畝がじんわりと温かくなり、クレヴァスの中には生温かな蜜が溢れ出して、ますます掻き回したくなるほどむず痒くなってきた。思わず太腿の間に手を伸ばしかけ――慌てて止める。

誰の目にも触れさせたことのない恥ずかしい場所が、はしたなく潤ってしまったことを知られたら……いやらしい相馬のことだ、きつと嵩にかかって責め立ててくるだろう。

（な、なにも感じてない……なにも、感じてなんか、いない……）

いかついグローブの手指をギュッと握り締め、唇を噛んで秘部の疼きに耐える由佳莉だが、どんなに気を張ってみても、乳房を揉み搾られるたびに股間の肉ビラは熱くなり、ジクジクと甘やかな蜜を滲ませる。入り口が蕩けるのに従い、膣の中までが潤んできた。恥丘が汗ばみ、ぴったりと貼りついたライディングスーツの中でどうしようもなく蒸れてしまう。

「く……ん……」

むず痒さに耐えきれず、身を僅かに振ると、M字に開いた膝が内側を向いて、ぶるぶると震え始める。目敏く見つけた相馬が、香汗の珠を浮かせた少女の耳朶に唇を寄せ、生温かい息を吹きかけながらそっと囁いた。

「気持ちよすぎて、いやらしい場所からいやらしい汁が溢れてきたのか？」

「……っ!? ち、違うっ! そんなんじゃない……あうっ!」

疼く媚肉の畝が、いきなり押し潰された。相馬の手が革服を掴み、グイッと引っ張ったのだ。肉割れの中に溢れていた淫液が噴きこぼれ、ライディングスーツの裏地を伝って和毛の茂みや、会陰部、肛門へと流れ広がる。

「いままなか音がしなかったか？　ぐじゅって聞こえたような気がしたぞ？」

嘲笑を含んだ声に、由佳莉は耳の先まで真つ赤になった。爆発的に膨れ上がった羞恥に身を強張らせると、下腹部に力が入り、膣穴が捻れて大量の蜜が溢れ出してしまう。ローションの香料とは別の、甘酸っぱい匂いを嗅いだような気がしてますます恥ずかしくなった。（こ……これくらい、なによ！　美奈子が……美奈子が、待ってるんだから！）

胸の内では友人の名を唱え、羞恥に震える自分を懸命に叱咤する。大人しく真面目な彼女がされたことは、もつと酷いことだ。この程度で音を上げていて、なにが紅だ——挫けそうな戦意を必死に掻き立てていると、相馬が思い出したかのように続きを語り始めた。

「そんなこんなで石動は、商工会にも顔が利く。駅前の一等地に事務所を構えてやがるし、運河沿いの倉庫まで借りてやがる……」

（——！）

事務所と、倉庫——場所に関連する語を聞いた途端、由佳莉の瞳に鋭い光が戻った。美奈子が捕らわれているのはどちらだろう？　ほかの者ならともかくこの相馬なら、監禁場所がどちらであるかまで把握しているはず……首を振り、頭蓋に満ちた愉悅を追い払う。乱れた呼吸を整え、掠れた理性を掻き集めて、情報をもっと引き出す方法を考えた。

（……焦ったら、ダメだ。相馬のことだ、物欲しそうに訊いたらきつと、わざと遠回しなことを言い始める……）

「ひゃあっ!？」

尻穴を占拠した細長いローターがいきなり震え始めた。粘膜隔壁越しに伝わる振動に、膣洞を奥まで満たした木刀が激しく共鳴する。切っ先は子宮を突き揺らし、厚みのある刀身は膣壁を掻き混ぜ、膣口を擦り上げた。股間に蹲っていたチンピラが手を離すと、木刀は震えをますます強くする。

「あああ! あうああっ! くううあああ——ッ!!」

揉みくちやにされた膣ビラがグッチャグッチャと卑猥な音を立てまくり、直腸粘膜は蕩けるほどに揺さぶられて、激的な快感が湧き起こる。激震は背骨を伝って脳髓を突き上げ、次々と肉悦の火花が炸裂する。紅髪の少女が電流拷問を受けているように激しく身を振り、胸の双球をちぎらんばかりに振り回して絶叫すると、反動で木刀が揺れ、余計に膣穴を挟られてしまう。

「あ、ああ!? や、やだ、腰が勝手に……あああっ!」

吹き上がる衝撃的な快感が脳髓を直撃し、意識と身体を切り離れた。少女の腰が卑猥なダンスを始める。愛液まみれの肉唇をクイクイッと前方に突き出し、男を誘うように左右に揺らす。処女を失ったばかりとは思えないほどの貪欲な腰遣い。熱い吐息を漏らしながら、濡れ壁を捲り返す淫棒の感触に酔い痴れる。

「ひあっ! あああっ! と、止めて抜いてお願い止めてえっ!」

叫ぶ言葉とは裏腹に、粘液を滲ませた膣襞は重みで徐々に抜け出ていく朱塗りの剛棒にしっかりと絡みつき、射精を求めて揉み搾っていた。細いウエストはくねりまくり、尻は左右に大きく打ち振られる。溢れ出た愛蜜はブンブンと振り回されている木刀を伝い落ち、辺り一面に牝香を放つ滴を撒き散らした。

「すげえよがりっぶりだな。どう思うよ、石動さん？」

「参ったな。あんなに強いからもつと凜とした女の子だと思っていたのに。これじゃあただの淫乱だよな」

「そんな、そんな……あ、ああっ！ ふああああ、ああああああ……」

ふたりの囁りにカアツと赤面した少女から、木刀がずるずると抜け始めた。硬い表面に擦られた膣口に痺れるような快感が生まれ、身体ばかりか脳までが肉悦に痙攣して意味ある言葉が紡げなくなる。

ぬぼん、と音を立てて木刀が落ちた瞬間、切っ先が膣口裏側を抉り、Gスポットを擦り上げた。

「ひゃんッ!？」

裏返った声を上げ、バネ仕掛けのように鋭く反り返る由佳莉。張りの見事な尻肉がプリッと弾む。しかし、それでも捲られたショーツは元の位置には戻らない。愛蜜にまみれた薄布は紐のように細く攪れ、厚みを増した肉土手の横に引っかかって股間を締め上げてい

る。股間に大きく花開いた粘膜薔薇からこぼり、こぼりと蜜の塊がこぼれ出し、広げられた脚の間に粘液の水溜まりを作った。

(あ、ああ……すごい……)

神経の集まる場所に刻み込まれた悦感^{ねが}は恥丘の奥にいつまでも残り、肉欲の泥濁^{ぬがろみ}に呑み込まれそうになった。頭の中には温かな靄が充満して、恥ずかしく思うことすら難しくなってくる。

転がった木刀を拾い上げたチンピラが、刀身を濡らした粘液に混じる鮮血の筋を見て、呆れたような声を上げた。

「処女だったのか？ その割に、ずいぶんと気持ちよさそうじゃねえか。感じやすいんだな、辻斬り女は」

「うう……そんなこと、言う……な……」

呻く由佳莉だが、尻穴で蠢いている淫具に操られているのか、秘部を突き出し、剛棒を求めるかのように揺らして淫らな蜜と匂いを振り撒き続ける。乱れた呼吸に合わせて不規則に上下する胸では、硬く膨れ上がった乳房がたぶたと波打っていた。

(ダメ、ダメ……おかしくなっちゃう……)

太くて長くて硬いモノを入れられると気持ちよいことを知った膣洞が、いやらしく捻れ、ダラダラと女汁を溢れさせて喘いでいる。子宮では淫欲のマグマが沸き返り、白濁愛蜜が

噴き出してきた。一度呼び覚まされた牝の本能は羞じらう少女を無視して暴れ回り、震える唇から媚声がこぼれ出そうになる。

「そら、今度は落とすんじゃないぞ。しつかり啜えやがれ」

「あつ！ く、うう……っ！」

再び潜り込んでくる木刀。

剛棒に押し潰された膣壁が、歓喜の汁を滲ませながらざわめき立つ。淫欲の坩堝^{るつぼ}と化した肉洞がキュンキュンと収縮し濃厚な牝エキスを吐き出した。子宮から吹き上がった淫欲の炎が、直接脳の底を炙るまでに火勢を強める。全身が煮えたように熱くなり、香汗に濡れた柔肌が赤々と火照り、ぬらぬらと輝き始めた。

（ああ、入ってくる、入ってくるう……っ！）

胎内に押し入ってくる圧倒的な存在感。由佳莉は頬を赤らめ、狂ったように髪を振り乱す。こんな陵辱、望んではない——はずなのに、責め棒が押し入ってくると頭蓋が痺れ、視界が白く霞んでいく。木刀レイプを堪能するかのように腰が蠢き、唇からは桃色の吐息が漏れ出てしまう。

クツチユクツチユ……ヌプププ……。

蠢く膣壁は硬い木刀に粘膜壁を絡みつかせ、膣口を咀嚼するように動かして、奥へ奥へと引きずり込んでいく。淫らな渴望に支配された粘膜器官は驚くべき食欲さで、男の命ず

るままにガッチリと剛棒を咥え込んだ。

「ふあ、ああうああああ……ふあ、うやあ、んはああああつ！」

膣穴に潜り込むにつれ、アナルローターとの共鳴が始まる。ぶるぶる震える木刀が淫肉を擦り上げ、揉み潰し、乱暴なほど強く掻き回した。白濁した本気汁の滴を垂らす肉ビラがニチャニチャニチャと泥を捏ねるような音を立てると、脳裏に快美の電流が走る。そのたびに剥き出しの乳房を揺すり上げ、弾けそうなほど膨らんだ紅い肉突起を振り回す紅髪の少女。背ではポニーテールが激しく踊り、腕を吊り上げた鎖がギシギシと軋む。

「うあああああッ！ らめ、らめえ、ぬひええ——っ！」

股間から染み広がる肉悦に、舌まで痺れてしまった。瞳は焦点を失って虚空を彷徨い、真っ赤に熟した頬を歡喜の涙が濡らす。

「そんなに暴れたら、大事な部分が壊れちゃうよ」

あまりの乱れっぷりに苦笑した石動が、由佳莉の背後に回り込み、胸で暴れている双球をギュウと掴んだ。途端、指に揉み歪められた乳房の中でも肉悦が沸騰し、少女は新たなステージに押し上げられる。

「ら、らあめえ！ もんりや、やあああつ！」

女のようにほっそりとした指が胸の脂肉に喰い込むたびに、胸乳が蕩け、快美感の溶岩を噴き出させて脳幹までをも熔かし始めた。身体の境界線がぼやけ、震える淫棒に犯され



ている肉穴からドロドロと流れ出ていくような気がする。弾けそうなほど痼り勃った乳首を硬い指先で抓まれると、瞼の裏に稲光のような閃光が走った。肉鐘が沸騰し、乳頭がむずむずとして、いまにも乳が噴き出しそうに感じる。

「あはは、オッパイが悦んでるよ」

ピクピクと震え始めた緋色の突起を嘲笑った石動が、指先に力を込めてさらに強く揉みしごき始めた。指の間から柔肉をむにゅっとはみ出させ、麓から先へ向けて搾乳する。肉芯の疼きが頂点へ集まり、逃げ場を求めて乳首の中へ集中し、痛いほど痼ってくる。

「あうやあ……ああ、あああ……っ！」

膨らみすぎた肉突起は、冷たい空気に撫でられただけでも強烈な快感が炸裂するようになった。悶え踊り、喘ぎ狂う紅髪の少女。

（ダメ、もうダメ……熔けちゃう、私が、熔けちゃう……！）

揉み搾られた双房が、木刀に掻き回されている腔穴が、ゼリーのように柔らかくなっていた。局部だけではない。伸びやかな脚も細いウエストも、鎖に吊り上げられた腕までもすべてが蕩けきっている。脳髄液は淫水に変わり、淫靡な悦び以外感じられなくなつて、美奈子のことも、ここがどこで誰になにをされているのかも忘れてしまひそうだった。

「ああああ……ふあ、ふああっ！ やあ、いやあああっ！」

尻穴を犯したローターの振動に声が震え、胸を揉み込む指に同期して媚を含んだ甘え声

が漏れる。潤んだ瞳はゆらゆら揺れてなにも映さず、頬は淫らに弛緩し、嬌声を漏らす唇からは愛蜜のようにねっとりとした涎が垂れ落ちた。

さらに、より強烈な快美感が股間に炸裂する。包帯のチンピラが木刀を握み、上下に動かし始めたのだ。

「くああっ！ あああっ！ あアアッ!!」

一際大きな声を上げ、ビクビクン！ と反り返る由佳莉。朱塗りの剛棒が粘膜壁を押し潰し、掻き混ぜ擦り上げるたび、雷に打たれたように身を振り、狂ったように躍り上がって媚鳴を吐く。膣口はますます蕩け、木刀に絡みついて捲り返り、蜜まみれの紅い肉花弁を大きく広げた。太い刀身が抽送されると、秘肉はこぼりこぼりと音を立て、大量の牝蜜を溢れさせる。

（か、身体が、勝手に……あああっ！）

細いウエストが恥ずかしいほどくねり、尻が男を誘うように淫らに打ち振られた。そのたびに木刀が捻れ、蜜壺がさらに掻き回されて激感が爆発し、ますます尻が踊ってしまう。「もうらめ、らめ、らめ……と、止まらない……止まらないの、ああっ！ と、飛んりやうううッ！」

蓄積された肉悦がついに臨界点を超え、鋭く反り返った。身体が宙に浮き上がり、頭の中には銀河が爆発する。

純白の閃光が脳を焼き尽くし、身体中の穴という穴がすべて開ききってしまった。恍惚に弛んだ目元からは感涙が溢れ出し、震える唇からはあられもない声とともに涎がタラタラと垂れ流れ、木刀に捲り返された膣穴からは白濁した本氣汁がこぼれ落ちる。最後には、見せつけるように突き出された下腹部の筋肉がキュウッと緊縮して――

「うやあ、うやあっ！ 出る、出ちゃううっ!!」

ピシヤアアアッ！

ぽっかりと口を開けた尿道孔から薄く色づいた液体が勢いよく迸った。小水の奔流が生む微細な振動が、熱く蕩けた淫肉の中心に凄まじいばかりの解放感を刻み込み、股間を満たした肉悦に新たな色彩を加える。

「ふあ、ふあああ……!」

排尿の悦びに頬を弛め、由佳莉はうっとりと目を細めて弛緩した。淫欲の泥沼に頭の天辺まで浸かりきり、

(すごい……これ、すごい……!)

もはやそれしか思えない。

意識を温かな桃色の靄に占拠され――少女はフッと氣を失った。

第六章 歪められた絆

「あ、ああああああああつ!?」

股間を襲う激震に、由佳莉は叩き起こされた。秘穴にねじ込まれた木刀が細かく、しかし強烈に振動している。擦り上げられた膣壁から熱い肉悦が染み広がり、突き揺すられた子宮では淫欲のスープが沸き返った。

（な、なに!? なにをされてるの!?）

知りたいのに、背骨を伝って押し寄せる快感の津波が脳髓を直撃し、頭の中はたちまち桃色の靄に覆い尽くされてしまう。手足を何者かに押さえられていて身体を丸めることもできず、甘い吐息をこぼし、背を弓なりに反らしてビクビク痙攣することしかできない。

「——はあ、はあ、はあ……?」

しばらくして振動はやんだが、硬い刀身に激しく掻き混ぜられた肉穴はドロドロに蕩け、太さに押し広げられた粘膜ビラはねつとりとした蜜をこぼして喘ぐようにヒクついていた。膣洞の中には激震の余韻が尾を引き、恥丘の裏側に熱い疼きがわだかまり、指を突き入れて撫で慰めなくなっている。乱れた息を繰り返し、羞恥と愉悦に赤らんだ顔を巡らせて、由佳莉は自分の置かれた状態を確かめた。

失神する前と同じ、薄暗い倉庫の中。

いつの間にか床に仰向けに寝かされ、大の字に広げられた手足を大柄な少年たちに押さえ込まれていた。紅いセーラー襟の制服は黒いブラウスごとはだけられており、フリルつきのブラジャーもカップを繋いだ紐が解けて開き、肩に引っかかったまま。桜色に染まった乳房が重力に逆らって丸く大きく膨れ上がり、頂点に緋色の肉突起を尖らせてたわわに実っている。なだらかに起伏する伸びやかな腹の柔肌は朱色に火照って艶めかしく光り、呼吸に合わせて大きく波打っていた。

優美に広がる腰のラインはまだチェック柄のスカートの下に隠されているが、捲れ上がった裾の下に媚肉を隠す薄布はない。恥丘を覆う黒い逆三角形の茂みが淫水まみれになっている様子も、朱塗りの木刀に左右に押し歪められた肉土手が朱鷺色に茹で上がっているさまも、丸見えになっていた。蜜を滴らせる肉ビラは深々と挿し込まれた硬い刀身にねっとり絡みつき、貪るように撫で回している。紅く色づいた会陰部の下、アナルローターを咥えていた肛門はいまは空で、赤黒い粘膜穴がポツカリと大きな口を開けていた。前の穴から噴きこぼれた牝汁が内腿を濡らし、体重でむにゅりと潰れた尻肉を伝って床に大きな水溜まりを作っている。

足首には荒縄と、青竹の感触。靴下はなく、足指の間を冷たい空気が舐めている。

「あ……い、石動……」

肉悦に朦朧とした首を起こすと、左右に大きく広げられた脚の間にニヤニヤと笑った青年が座り込んでいるのが見えた。どうやら足首の間に渡された青竹に、重石^{おもし}として腰を下ろしているらしい。右手に持っている機械は、小型の回転ヤスリだろうか。小さく低く、蜂の羽根音のようなモーター音が響いている。

そして――。

「……み、美奈子!」

迷彩服の青年のすぐ傍らに、黒縁眼鏡の少女がいた。背に貼りついた少年に腕を捻り上げられ、頬を赤らめて、冷たいコンクリートの床にアヒル座りしている。制服の前が無惨に破かれていて、頂点に莓色の肉突起を勃たせた形よい胸乳や、白い柔肌が艶めかしい腹部が露わになっていた。

しかし、赤面しているのはそのせいではない。精液に汚れたレンズが映しているのは、床に寝かせられて手足を押さえられている紅髪の少女。あれほど強かった友人が、乙女にとつて一番大切な場所に木刀をねじ込まれ、あられもない声を上げて悶えまくっている――愕然とした表情の裏にあるのは失望か、それとも蔑みか。

（見ないで……こんな私、見ないで……!）

胸が張り裂けそうなほどの羞恥を覚え、由佳莉はギュッと目を閉じた。

「あれれ？ また寝ちゃったのかな？」

羞じらう少女を嘲笑った石動が、左手で少女の股間から生えた木刀の柄尻を掴み、回転する円盤状のヤスリを近づけ、押し当てた。

ガ！ ガガガッ！ ガガガッガガガガガガ——！

「ひあつ！ くうう！ あ、あうあうあああつ！」

激しく震える朱塗りの剛棒に蜜壺を掻き混ぜられた紅髪の少女は、裏返った声を上げながらビクビクと反り返る。身体の中でもっとも敏感な粘膜器官内部に電撃のような快感が炸裂し、胸の上では肉悦を孕んでメロンほども大きさに膨れ上がった巨乳がちぎれんばかりに跳ね踊った。

「や、やめ……止めてえっ！」

次々と爆発する快美感に尻が勝手に浮き上がり、チェック柄のスカートが捲れ返るほど激しく悶えるが、どんなに必死に藻掻いても四肢をガッチリと押さえ込まれているため強烈な股間責めから逃れることができない。

激震が背骨を突き崩し、脳幹までも激しく揺さぶり立てた。振動に掻き混ぜられた膣穴は肉欲渦巻く坩堝と化し、身体の内側から熔かし始める。瞼の裏で稲光が閃き、頭の中が真っ白に塗りつぶされていく。

（くうう……あああ！ だ、ダメ、美奈子が見てるのに——！）

沸々と湧き上がる肉の悦びに、由佳莉の理性が蕩けていく。傍らから覗き込んでくる親



友の視線を頬に感じ、舞い上がるような気分を懸命にこらえているのに、くびれた腰ははしたなく捻れ、震える唇からはあられもない媚声がポロポロとこぼれてしまう。

「くうう……あああ、あああうううッ！」

三角形に削り尖らされた柄尻の最後部を丸めるように、少女の膣穴へ木刀をまっすぐ押し込むような角度でヤスリが押し当てられた。硬い切っ先が粘膜隔壁越しに子宮を押し潰し、刀身を伝った振動が淫欲中枢をダイレクトに揺さぶり上げる。

（と、飛んじやうう！）

爪先から脳天を突き抜けていく、突風のような飛翔感。

頭の中が白く灼け、

「あうあつ！ で、出ちやうう！」

木刀に突きまぐられた肉室がキュン、と鋭く緊縮して煮え滾る本気汁を噴き出した。刀身に絡みついた肉ピラを震わせながら、濃い匂いのする白濁愛液が迸る。

（す、すごい……コレ、すごい……）

強烈な解放感が爆発的に広がって、すべてを忘れてしまいたいそうになったが――。

「またお漏らしかい？ 感じまくりじゃないか。君の友達っていやらしいんだね」

石動が美奈子に話しかけているのを聞いて、由佳莉の心臓がギュッと縮み上がった。股間の肉ピラに感じる視線は、眼鏡娘のものだろうか。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>